【326】

氏　名（本籍）	髙橋佑太（千葉県）
学位の種類	博　士（芸術学）
学位記番号	博甲第 6201 号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	**王澍書論研究** －古碑帖と書流の観点から－

主　査	筑波大学准教授	博士（芸術学）	菅野智明
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	守屋正彦
副　査	筑波大学教授	博士（芸術学）	中村伸夫
副　査	大妻女子大学教授	博士（文　学）	松村茂樹

論文の内容の要旨

（目的）

本研究は、中国清朝初期に活躍した能書家である王澍（1688 － 1739）の書法理論を手がかりとして、王の書法観の特質を碑や法帖、指南書など論及対象別に導くとともに、それらを包括した王の書論の史的意義を解明しようとするものである。

（対象と方法）

王の書論では、旧来『竹雲題跋』、『虚舟題跋』、『淳化秘閣法帖考正』（付『論書賸語』）、『古今法帖考』が広く知られていたが、近年、これに『翰墨指南』の翻刻が加わる状況にあった。本研究では、独自の調査で新たに『翰墨指南』付載の論書信冊や、『作字先後法』、『分部配合法』（蔣衡と共著）等、従来閑却視されていた王の書論を発掘し、如上の既刊書論と併せ、広く網羅的に対象を据えている。また、本研究では、王の各書論が言及する古典の逐一について、前後の時代の書論における言及と綿密に比較分析しつつ、王説の創見を明確化させるという方法を各論的に実践している。それら各論的検討を総合し、包括的な王の書法観・王説の史的意義を、帰納的に導くものである。

（結果）

本研究は、最終的に以下のような知見を提起している。

王の書論の特質は、①書流への強い意識、②技法の重視、③徹底した分類の三点に集約できる。①は、例えば個別の漢碑と唐碑の書法的接点を一つの書流として捉え、それら複数の書流の分合に、秦から清までの書法通史を俯瞰するものであり、②は各古碑帖への着眼が、執筆・用筆から結構に亘る技法的側面に傾注すること、③はそうした技法重視が、古碑帖の精緻・細密な書法的分類に結び付くことを指す。王の書論は、大局的な①の視点と微視的な②③の視点との併有に従来の書論に窺われない創見が認められ、その併有が、後の清代書論を牽引する翁方綱や阮元の所説に寄与した点も、書論史上の足跡として特筆できる。

（考察）

上記の結果を導くため、本研究では以下の如き章立てにより、各論的な問題を考察している。

第１章「王澍書論の版本と現存題跋」は、王の書論の各種版本を精査し、本文校訂によって諸本の系統を見通すとともに、肉筆として現存する王の題跋を網羅的にリスト化するものであり、これによって検討対象の明確化を図っている。

第２章「王澍の法帖観」は、『淳化秘閣法帖考正』『古今法帖考』及び法帖関連の題跋を対象に、王の法帖論の特質を探るものである。この章では、まず上記書論から論及法帖作品を単位に所与の評語を比較分析し、一部の作品に王羲之を中心とする正統的な書流が見通されていたことを指摘する。更に、王が主に技法の点から各法帖作品の真偽鑑別を重視したこと、その姿勢から偽書混在の董其昌『戯鴻堂法帖』よりも、学族たる王肯堂の『鬱岡斎墨妙』を評価したことに注目している。

第３章「王澍の碑刻観」は、主として唐楷・漢碑への言説を対象に、それぞれの書法観を明らかにするものである。唐楷では、特に欧陽詢の九成宮醴泉銘を高く評価するが、その評価は、欧陽の各碑刻の共通性を踏まえた上で九成宮醴泉銘の個別性に着目するものであり、こうした俯瞰的視野から個別碑刻を価値付ける点に、王独自の評価法を見出している。一方、漢碑では礼器碑を最上とするが、漢碑を三つの書流の枠組で捉えようとする俯瞰的視野が同様に確認され、そこから礼器碑評価を試みた点を王の功績と捉えている。

第４章「筆法と結構の重視と指南書の執筆」は、『翰墨指南』及び付載の論書信冊や、『作字先後法』、『分部配合法』（蔣衡と共著）を手がかりに、王の技法論の原理的な側面を考察するものである。これらの著述では、執筆・用筆から結構に亘り、それぞれの要諦を細分化して示す傾向にあり、それが指南書として結実することで、前代の指南書から飛躍的な進展を遂げた点を特筆している。

第５章「王澍書論の後世の受容－翁方綱との比較を通して」は、清朝中期の書学を主導した翁方綱が、頻繁に王説を引くことに着目し、その受容のあり方を探るものである。翁の王説引用は、概してそれを批判する意図が窺われるが、両説が共通して取り上げる古典作品への論及を比較するなら、実際には核心的な部分で両説に一致が認められる。このことから、翁の王説批判は恣意的・偏向的な側面があり、却って王説が後代の書論へ看過し得ない影響を与えた点こそ、その書論史的貢献として評価すべきと主張している。

なお本研究では、王の書論理解の一助として、付章「王澍の生涯とその交友」を設け、王の伝記資料の集成と、交友人士の簡介を添えている。

審査の結果の要旨

従来の清朝書論研究では、王澍の所説を断片的に取り上げ、紹介・回顧することはあっても、その総体の眺望から王説の真価に迫るものは殆ど見られなかった。この点に鑑み、本研究が新たな発掘も含め、王説を網羅的に収集し、その包括的な評価を目指したことは、先駆的な成果として特筆される。のみならず、王説に前代からの飛躍的な進展を見出しつつ、清朝考証学が全盛を迎える次世代の書論への連続性をも指摘し得たことは、極めて新規性に富む知見として注目される。ただし、本研究で主要な分析対象とした王の論及古碑帖作品は必ずしも十全とは言えず、如上の知見は更に補強すべき余地を残す。また、王をとりまく学術的・文化的背景への視点も必要とされるところである。とはいえ、現下の清朝書論研究における本研究の意義は決して軽微なものではなく、今後、本研究の成果は一つの指標としての役割を果たすものと高く評価できる。

平成24年１月24日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（芸術学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。